

香取遺産

Vol.100

間宮忠敬記念館

☎(54)1118

間宮倫宗を贈るの序

伊能忠敬と間宮林蔵



▲九州へ向かう伊能忠敬から蝦夷地へ向かう間宮林蔵へ贈られた

1811年の冬、九州への測量を控えた伊能忠敬から、蝦夷地（現在の北海道）の探検と測量のために北へむかう間宮林蔵（倫宗）に一通の送別文が贈られました。この間宮の測量の成果が、のちに忠敬に提供されて、伊能図が最終的に完成をみます。

従来は、1800年に忠敬が行った蝦夷地南部の測量に、この時実施された間宮による蝦夷地北部の測量データが付け加えられた、とされてきました。しかし、昨今の報道でも話題になったように、最終的に完成した伊能図では、蝦夷地南部についても間宮の測量の成果が反映されていることが明らかとなりました。

伊能図の完成には、これまで考えられていた以上に、間宮の貢献が大きかったことになりました。

間宮は現在のつくばみらい市に生まれ、忠敬とは師弟関係にありました。間宮は、忠敬が蝦夷地を測量する途中で初めて出会い、忠敬の晩年は江戸の忠敬宅に同居して、一

緒に暮らしていたこともあり、ました。恐らくはこの時期に、忠敬から本格的に測量術を学んだのではないかと推測されます。

間宮は忠敬より30歳年下でしたが、忠敬は「日本に稀なる大剛者」と評して間宮の意気を敬愛し、その間柄は「相親しむこと師父の如し」と述べています。同居中は、将来を期待する孫たちの教育について忠敬が間宮に相談したり、間宮からは孫たちに着物を贈ったりするなど、家族を含めた親密なつきあいがありました。

そうした2人が、互いに与えられた使命を果たすために、九州と蝦夷地、数百里を隔てて別れるにあたって記されたのが、送別文「間宮倫宗を贈るの序」です。これは現在、国宝伊能忠敬関係資料のなかに存在し、その最後は以下のように結ばれています。「行け倫宗、よくその職を修め、以て政府非常の功を裨益せんか。これを贈言の別となす」